



日本最初のプラネタリウム投影解説書

1. 電気科学館が作った投影マニュアル

近頃、1937年に電気科学館が開館した頃の事を調べています。そんな中、開館当初のプラネタリウム解説の内容について興味を持ったが、資料が見当たりません。30年分の『うちゅう』を調べてみると、かつて電気科学館職員であった黒田武彦氏が1994年7月号で、当時の記録はほとんどないと記しています。

それでも、何か手がかりはないかと当時の資料を調べてみると、開館直前に製作された館内向け冊子『遊星儀(プラネタリウム)詳解』の中に、解説例が記されているのを見つけました。いわば、日本最初のプラネタリウム投影マニュアルです。冊子の中身は、プラネタリウム設置に協力した京都大学の山本一清や高木公三郎が海外で見た科学館での経験をもとに作成したようです。

では、そこに記された、開演から終演までの流れを要約して紹介しましょう。

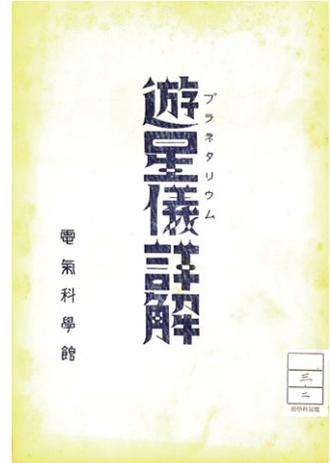


写真:「遊星儀詳解」の表紙

(1)開演

音楽とともにドーム内を闇にし、「冬の大阪」という文字を投影する。これが消えると星が現れてくる。音楽の音を弱くしながら説明に移る。

(2)冬の大阪

冬の夜、大阪の空に見える星座について説明する。有名な星座は、星座絵や神話の絵などを見せる。

(3)時と暦

太陽の運動から、日月年の単位や各季節による昼夜時間などを説明する。

(4)月

月の運動を通じ、月の満ち欠けや中秋の名月、日月食について説明する。

(5)惑星

惑星の年周運動を見せて、惑星個々について説明を加えていく。

(6)夏の大阪

冬の大阪と同様、夏の星空の紹介。

(7)南北

大阪より北へ進み、高緯度地方の星や白夜などを見せる。次に南へ進んで赤道以南地方に至り、南十字星などを見せる。

(8) 歳差

歳差運動により、北極星がかわっていく様子を紹介する。

(9) 空の奇観

最も美観を呈する場面で、連星、変光星、星団、星雲など、写真などを交えて説明する。加えて流星、彗星を見せる。

(10) 宇宙

銀河系、銀河、宇宙の大きさや構造を説明する。

(11) 終演

最後に日周運動を行いながら、次第に暁の色を濃くし、適当な音楽とともにドーム内を明るく照らす。

以上、これらを見ると、かなり高度かつ盛りだくさんの内容が挙げられており、45～50分という投影時間内に全てを紹介するのは難しいでしょう。しかし、マニュアルの最後には「以上の順序、時間については、実際にプラネタリウムを試運転してみてよく研究する必要がある」とあるのを見てホッとしました。つまり、このマニュアルは、電気科学館の開館前に作られたもので、実践した上でまとめられたものではなかったわけです。

2. 開館直前のプラネタリウム投影

では、開館直後においてどのような解説が行われていたのか、前述のようにそれがわかる資料が残っておらず不明です。しかし、開館の10日前に行われた要人視察の際の投影概要を記した記録が伝わっていますのでご紹介しましょう。この投影の所要時間は36分ですから、実際の営業投影に近いものであったと考えられます。

1. 入場者の視力調整のため、太陽系や惑星の絵を投影する(約5分)
2. 場内を少しずつ暗くし、昨日の夜の星空を投影する(約2分)
3. 今日の日の出より日没までの様子を映し、太陽を紹介する(約2分)
4. 太陽系の惑星について説明する(約5分)
5. 今夜の星空を投影し、恒星や星座の代表的なものを説明する(約10分)
6. 特に興味深い天体写真や星座を投影し、説明する(約8分)
7. 音楽と共に徐々に明るくし、途中流星を投影する(約4分)

以上、これらの資料を見ると、音楽と共に日没・日の出の様子を見せる演出が既にあったようです。また、開館当初は解説テーマが設定されず、プラネタリウムの機能のお披露目的な投影であったように思われます。そして、営業投影で毎月のテーマが設定されるようになるのは、開館から約2年後ですから、時間をかけて、徐々に投影パターンが出来上がっていった様子が伺えます。

嘉数 次人(科学館学芸員)